



電通
ラジオ局 開発推進部 部長
宮澤由毅さん
radikoの運営母体、IP サイマルラジオ協議会の事務局を預かり、各方面の難しい交渉を取りまとめた。「ラジオによる想像拡大効果」を宇都宮大学などと共同研究している

ラジオだから表現できる
価値あるコンテンツを
若い世代にも聞かせたい

スイッチひとつでラジオが聞ける端末もなければ、電波も入りづらい。ラジオに迫る難聴の危機。ラジオビジネスに携わって20年の宮澤さんは、危機意識と同時に不満も抱いていた。「ラジオはコンテンツ的にはリッチで面白いものがあるが、世の中の評価が低いように感じました。映像メディアの方が上位にあるという概念もそうです。でも、映像は特権的な価値も違う。音声でしか表現できないコンテンツや価値は当然あるはず」ところが、今の若い世代がその価値に気づくことも、ラジオを聞くための端末が身近にない。「既存の端末からラジオ音声が出てくるというところを実現したいと思いました。その中で、IPが一番手っ取り早いかなと」

実現に向けて動き出したが、さまざまな壁が立ち上がった。「システムなどの技術的な難しさもありましたが、一番大きかったのは権利問題と、既存のビジネスモデルへの影響でした。放送免許をベースに、決められたエリア内で販売するのが基本ですからね。広告面も出演契約においても、それらがコンテンツ（楽曲など）との約束事も解決する必要があった。宮澤さんは調整役として、権利者や放送局の説得に回った。結果、IPアドレスでアクセスに制限をかけるという着地点を見出した。「ビジネス的な広がりが見えてくれば、エリアの拡大などの可能性もあります。まずは、早いタイミングでスマートフォンに対応できるようにしたいと思います」

ラジオの未来が今、始まった。



慶應義塾大学
メディアデザイン研究科 教授
中村 伊知哉さん

ロックバンド「少年ナイフ」のディレクターを経て、郵政省に入省しインターネット政策を担当。1998年に退官し、MITメディアラボ客員教授、スタンフォード日本センター研究員を経て現職

通信と放送の融合が
20年越しで結実した。今後
ラジオは新しくなるはずだ

これまで来るのに20年かかったと思っているんです。radikoを、IPサイマルラジオ協議会の理事として支えてきた中村教授が、こう続ける。「通信と放送の融合という言葉が出始めたのが約20年前。ところが当時、放送側としては出来上がった広告ビジネスを守るのがベストの戦略でした。それが20年経ち、今のようにならなければならぬ。出てくる時期が来たのです。背景には、この2年で広告費が大幅に減ったことも関係している。「これまでのビジネスではなく、隣にもうひとつのビジネスを作らなきゃダメ、というところまできたわけですから。ただ、その一歩をラジオ側から踏み出すのは勇気が必要だったと思います。その決断を下すのは難しかったでしょうね」

この決断を後押しするように、国会にある法律が改正された。「放送法などの一部を改正する法律案です。成立すれば放送の規制が大幅に緩和され、通信と放送が融合したサービスも展開しやすくなる。これは通信よりも放送側にメリットが大きいですね」ネットとラジオが組み合わさることによって生まれるのが「ラジオの本物の力、コンテンツの力、文化の力、表現の力」であって、それらを音で凝縮したのが日本のラジオなんだと思います。ラジオはネットという新しい技術を使って、これまでにないような新しいメディアになる可能性がある。それをやるだけの力は、日本の放送局には十分ありますよ。お膳立ては整った。あとはラジオの底力に期待しつつ応援したい。

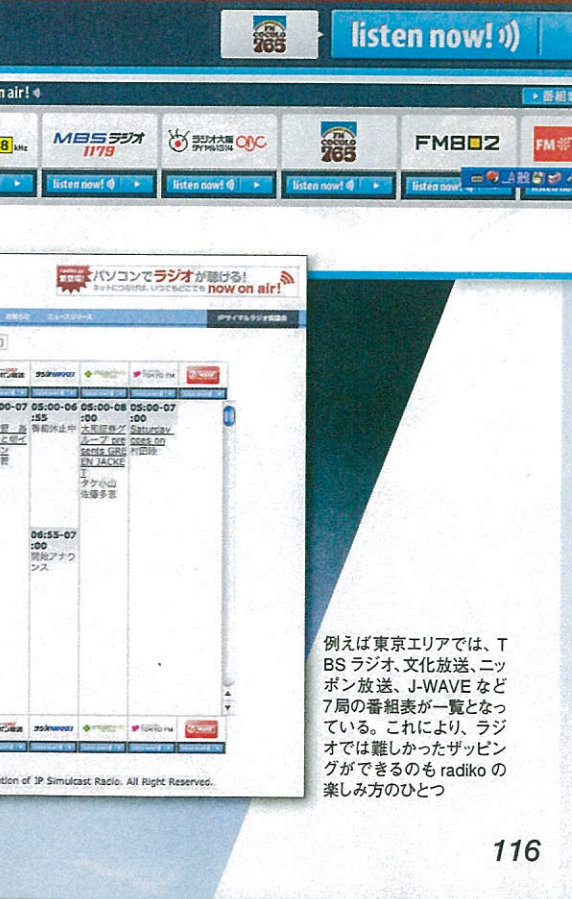
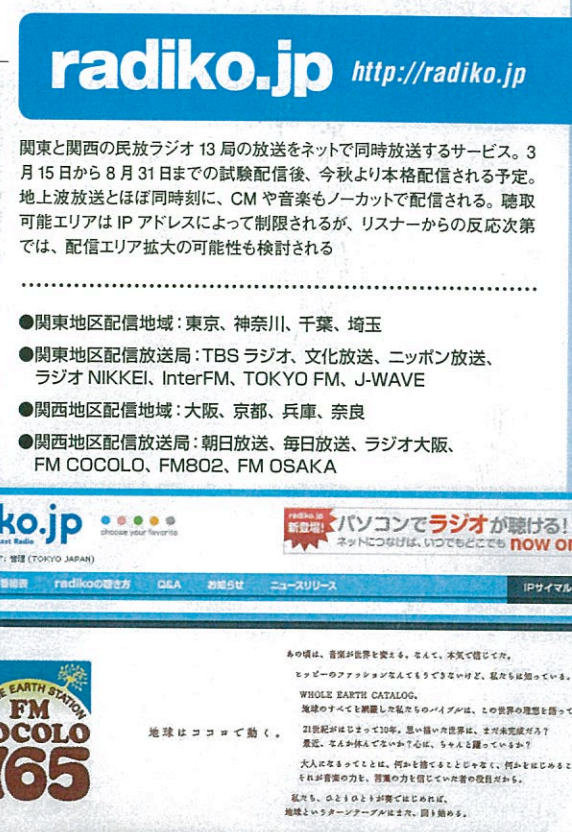
現場最前線で活躍する3人はラジオの未来をどう考える？

証言 05
DJ
サッシャさん
世界観を、どこでも
堪能できるように
なることが楽しみ！
「受信機を持っていない人が多いこの時代に、PCで聞けるようになったのは重要なよね。また、僕はiPhoneで海外のラジオを聞いているんだけど、それをカーオーディオにつないで聞くと、海外の道を走っている気分になれる。ラジオは、そんな独特の世界観を与えてくれるメディア。だからradikoもこの先、全国展開され、さらにスマートフォンでも使えるようになると、自分が聞きたい世界をどこでも楽しめるようになる。これこそ、radikoの魅力だね」

証言 04
各放送局が丸となり
radiko 開始に向け
権利関係をクリアした
ニッポン放送 デジタル事業局 局長
檜原麻希さん
「地上波放送と通信では権利関係が違います。ネット配信の場合、音楽ではJASRACや日本レコード協会、アーティストの団体などに個別許諾を得るのが通常。それが放送番組のネット配信集中管理が開始したことにより、サイマル放送であれば、権利関係をクリアできるようになったのです。またプロダクション、プロ野球をはじめとするスポーツ団体、ニュース配信会社など、すべての権利関係者に許諾を得るために各放送局が丸となり取り組みました」

証言 03
大阪での経験を踏まえて
最適な方法で試験放送を
迎えることができた
電通関西支社 統合メディア局 次長
三浦文夫さん
「2008年3月から大阪限定で、radikoの試験配信を開始しました。その時は、エンコーダーを放送局に置いたため、トラブルや保守・メンテナンスも各局が対応しました。今回の試験配信では放送局の音声をメディアセンターに集約し、一括してエンコードして配信する方法を取りました。これにより（選局しやすいなど）サービスの質が向上し、トラブル対応も迅速に行えるようになりました。また、スマートフォンなど、さまざまな配信方式にも柔軟に対応できます」

ラジオ新時代へ。
「radiko.jp」の試験配信開始で見えてきた
ラジオの未来



例えば東京エリアでは、TBSラジオ、文化放送、ニッポン放送、J-WAVEなど7局の番組表が一覧となっている。これにより、ラジオでは難しかったザッピングができるのもradikoの楽しみ方のひとつ